様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ５ 月 ２７ 日現在

機関番号：３２１０３
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2012～2013
課題番号：２４７３０５１２

研究課題名（和文）自己情報へのプライバシー意識が迷惑行為被害に与える影響

研究課題名（英文）Effects of privacy of the self on nuisance victimization

研究代表者
太幡　直也（TABATA, NAOYA）

常磐大学・人間科学部・助教

研究者番号：００５５３７８６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　1,100,000円、（間接経費）　330,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究課題では、プライバシーの観点から迷惑行為被害につながる個人情報公開を抑止する方策を提言するため、プライバシー意識の特徴を明らかにする（研究１）、自己情報へのプライバシー意識が未知の他者への自己情報の公開に及ぼす影響を検証する（研究２）ことを目的とした。
　研究１では、プライバシー意識を測定する、プライバシー意識尺度が開発された。研究２では、相手との関係予期によって、未知の他者への自己情報公開を規定する要因に違いがみられた。自己情報の公開の程度を高めていたのは、関係予期低条件では識別情報（自分を特定できる情報）へのプライバシーの低さ、関係予期高条件ではコミュニケーション期待の高さであった。

研究成果の概要（英文）：　The aim of this project was to offer strategies to restrain information disclosure of personal information that leads nuisance victimization in view of privacy. Two studies were conducted to investigate (1) characteristics of privacy of the self (Study 1) and (2) effects of privacy of the self on disclosure of personal information to stranger (Study 2).
　In Study 1, privacy consciousness scale was developed to measure privacy consciousness of the self and others. In study 2, expectancy of future interactions affected disclosure of personal information to the stranger; participants with low identifiable information privacy disclosed more personal information in the low-expectancy condition, whereas those with high expectancy to communicate with the stranger disclosed more personal information in the high-expectancy condition.

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：心理学・社会心理学

キーワード：プライバシー　自己情報　情報公開　迷惑行為被害

１．研究開始当初の背景

プライバシーは、自己情報に対する他者からのアクセスの規制と定義される（Altman, 1975; Westin, 1967）。プライバシーに関するこれまでの研究では、プライバシー状態を志向する心理について主に研究されてきた（岩田, 1987; Marshall, 1972; 吉田・溝上, 1996）。また、近年では、情報プライバシー（自己情報を他者に伝達しようと思う程度）に関する研究も行われている（佐藤・太幡, 2013）。

近年のプライバシーに関する問題の一つに、見知らぬ者から連絡を受けるといった、プライバシーを侵害される迷惑行為被害が挙げられる。例えば、自分の連絡先にプライバシーを意識しないと連絡先を不用意に他者に教えてしまいやすいといったように、自己情報へのプライバシー意識は対人行動に影響すると推察される。そして、自己情報を必要以上に多く表出してしまうと、迷惑行為被害（e.g, 見知らぬ者から頻繁に連絡が来る、望まない勧誘を受ける）を受けやすくなると想定される。上記の可能性を示唆する知見として、SNS での自己情報の公開を扱った、太幡（2011）が挙げられる。太幡（2011）では、属性情報（e.g, 性別）、識別情報（e.g, 名前）へのプライバシーが低い者ほど自己情報を多くの他者に公開している傾向があること、自己情報を多くの他者に公開する者ほど迷惑行為被害を受けた経験が多いことが示されている。

以上のことから、自己情報へのプライバシー意識の不足が過度な自己情報の公開をもたらす結果、迷惑行為被害の原因となる可能性が考えられる。しかし、これまでの研究では、以下の二点の未検討点が挙げられる。第一に、情報プライバシーに着目した研究はみられるものの（佐藤・太幡, 2013）、プライバシー意識の特徴について十分に検討されていない点である。第二に、自己情報へのプライバシー意識が実際の自己情報の公開に及ぼす影響について、実際の行動を測定した研究が行われていない点である。これらの点を検討すると、迷惑行為被害につながる個人情報公開を抑止するための方策を提言することができると期待される。

２．研究の目的

上記の状況を鑑み、本研究課題では以下の２点を検討することを目的とした。

(1)プライバシー意識の個人差を測定するプライバシー意識尺度を作成する。（研究１）
(2) 自己情報へのプライバシー意識が未知の他者への自己情報の公開に及ぼす影響を、実際の行動を測定し、検証する。（研究２）

３．研究の方法

以下、研究ごとに研究の方法を説明する。研究１は調査、研究２は実験によって実証的研究を実施した。

(1)研究１：プライバシー意識尺度の作成

プライバシー意識を、“プライバシー”という概念自体の意識しやすさと定義し、自他のプライバシーへの意識の程度を測定する、プライバシー意識尺度（Privacy Consciousness Scale; 以下、PCS）を作成することとした。PCS を作成するにあたり、以下の二つの調査を実施した。

①研究１－１：尺度作成

<u>調査対象者</u>　大学生 175 名に調査を実施し、回答に不備のある２名を除外して 173 名（男性 47 名、女性 125 名、不明１名、平均年齢 20.19±0.96 歳）のデータを分析した。

<u>調査内容</u>　PCS として、大学生７名と協議の下、プライバシー意識の定義に基づき、自己、友人、見知らぬ人のプライバシーへの意識、維持行動に関する項目を、表現を対応させて 10 項目ずつ作成した。各項目に、“１．あてはまらない”から“５．あてはまる”の５件法で回答するように求めた。続いて、情報プライバシーの程度を測定するプライバシー次元尺度（佐藤・太幡, 2009）（α=.71～.89）に４件法で、プライバシー志向性尺度（岩田, 1987）（α=.73～.85）、共感的配慮尺度（桜井, 1988）（α=.70）に５件法で回答するように求めた。各尺度について、下位項目の平均値を算出し、分析に用いた。

②研究１－２：信頼性、妥当性の再検証

<u>調査対象者</u>　大学生 177 名に調査を実施し、回答に不備のある 12 名を除外して 165 名(男性 75 名、女性 90 名、平均年齢 19.97±1.18 歳）のデータを分析した。

<u>調査内容</u>　PCS15 項目、行動基準尺度（菅原ら, 2006）の自分本位（α=.72），他者配慮（α=.65）に５件法で回答するように求めた。各尺度について、下位項目の平均値を算出し、分析に用いた。

⑵ 研究２：自己情報へのプライバシー意識が未知の他者への自己情報の公開に及ぼす影響

自己情報公開を規定する要因の一つとして、本研究では、情報プライバシー（自己情報を他者に伝達しようと思う程度）に着目する。太幡・佐藤（2013）は、ネット上での情報プライバシーを測定する MPS-I（佐藤・太幡, 2013）を用い、ある自己情報へのプライバシーが低いと、その情報をソーシャル・ネットワーキング・サービス上で多くの他者に公開していることを示した。このことから、情報プライバシーの低さが未知の他者への自己情報公開を促すと予測される。

一方、インターネットでは、コミュニケー

ションする他者と、一回限りではなく、その後の関係が予期される場合もある。対人関係の調整のために、自他のプライバシーの境界が調整される（e.g., Petronio & Durham, 2008）ことから、関係予期がある場合、自己情報公開への情報プライバシーの影響が弱まる可能性が考えられる。そこで、自己情報公開を規定する要因として、相手とコミュニケーションすることへの期待（以下、コミュニケーション期待）にも着目する。関係予期の高い他者に対してコミュニケーション期待が高いと、自己情報を開示する調整を行おうとするため、コミュニケーション期待の高さが自己情報公開を促すと予測される。

本研究では、未知の他者とチャットを行う前に自分のプロフィール画面を作成する状況を設定する。そして、プロフィール画面にある情報への入力情報数に着目する。

調査対象者　大学生 67 名（男性 17 名、女性 50 名、平均年齢 20.64±1.31 歳）に個別に実験を実施した。

実験計画　関係予期（高、低）の実験参加者間１要因計画であった。関係予期高条件では、他大学の相手と、後日、実際に会って話してもらう予定であると教示した。低条件では、上記の教示は行わなかった。

手続き　学生同士が初めてやりとりするときの特徴に関する研究であるとの教示の下、他大学の学生と 10 分間、パソコンでチャットしてもらう旨を説明した。そして、チャット前に、パソコン画面上で相手に示すプロフィールを作成してもらうと告げ、示したい情報のみ入力するように求めた。入力画面は佐藤・吉田（2008）を基に作成し、８項目と顔写真の合計９情報を表示する欄があった。８項目は、MPS-I（佐藤・太幡, 2013）を基に、名前、住所、性別、年齢、家族構成、性格、生活パターン、悩み事とした。その後、質問紙に回答するように求めた後、デブリーフィングを行った。

質問紙の構成　(a)MPS-I（佐藤・太幡, 2013）の、自伝的情報（e.g., 過去の出来事）、属性情報（e.g., 性別）、識別情報（e.g., 本名）に４件法で回答するように求めた（α=.77～.88）。(b)コミュニケーション期待４項目（e.g, チャットするのが楽しみである）（α=.77）、関係予期認知２項目（e.g, 相手と今後、直接会う可能性があると思う）（r=.65, p<.001）に５件法で回答するように求めた。あてはまるほど得点が高くなるように得点を算出した。

なお、上記の項目に加え、研究１で作成した PCS も測定した。本研究では、PCS の得点と自己情報の公開の程度には強い関連はみられなかった。そこで、主な分析からは除外した。

４．研究成果

以下、研究ごとに研究成果を説明する。

(1) 研究１：プライバシー意識尺度の作成

①研究１－１：尺度作成

PCS について、天井効果がみられた１項目を除外し、29 項目に因子分析（主因子法、プロマックス回転）を行った。まず、固有値減衰を元に３因子構造が妥当であると考えられた。因子数を３に指定して再度因子分析を行い、一つの因子のみに負荷量が.40 以上になることを基準として項目を選定した。最終的な因子パターンを Table 1 に示す。各因子に負荷量の高い項目から、“自己のプライバシー意識／維持行動（以下、自己意識／維持行動）”、“他者のプライバシー意識（以下、他者意識）”、“他者のプライバシー維持行動（以下、他者維持行動）”と命名した。自己のプライバシーへの意識と維持行動は同じ因子に含まれたため、他者の場合よりも両者の関連が強いと考えられる。

各次元の信頼性係数は、α=.67～.80 であった。下位尺度間の相関は、自己意識／維持行動と他者意識のみに弱い正の相関がみられた（r=.23、 p<.01）。

Table 1　PCSの因子負荷量と記述統計量（主因子法、プロマックス回転）

項目	自己意識／維持行動	他者意識	他者維持行動	*M*	*SD*
自己のプライバシー意識／維持行動					
他人にプライベートな質問をされたくない	**.73**	-.21	.05	3.36	1.13
自分のプライバシーは絶対に守りたい	**.73**	-.02	-.07	3.64	1.10
自分のケータイの中身（メール等）は、たとえ友人でも見られたくない	**.61**	-.22	.04	3.49	1.35
友人との会話を知らない人に聞かれたくない	**.59**	-.04	.31	3.13	1.30
自分の個人情報は誰にも知られたくない	**.58**	.07	-.05	3.17	1.17
普段から自分のプライバシーを気にしながら行動している	**.53**	.39	-.10	2.90	1.10
自分の個人情報が漏れるのではないかと不安になるときがある	**.52**	.20	-.08	3.36	1.23
他者のプライバシー意識					
普段から友人のプライバシーについて考えることはない（R）	-.31	**.71**	-.04	2.95	1.04
普段から知らない人のプライバシーを気にしながら行動している	.09	**.69**	.13	2.74	1.19
普段から友人のプライバシーを気にしながら行動している	.15	**.66**	-.00	3.05	1.07
普段から知らない人のプライバシーについて考えることはない（R）	-.10	**.66**	.07	2.46	1.16
他者のプライバシー維持行動					
目の前で知らない人が電話をしていると、その内容を意識的に聞いてしまう（R）	-.07	.06	**.69**	3.29	1.22
知らない人同士の会話を意識的に聞いてしまう（R）	-.27	-.02	**.64**	2.90	1.24
友人が電話で会話している内容を聞かないようにしている	.15	.04	**.53**	3.51	1.15
電車やバスでは、知らない人のケータイの中身（メール等）をのぞかないようにしている	.18	.07	**.51**	4.01	1.17
因子寄与	3.10	2.41	1.60		
因子間相関 自己意識／維持行動		.31	.01		
他者意識			.04		

注）Rは逆転項目であり、逆転後の記述統計量を記載した。

続いて、構成概念妥当性を検討するため、尺度間の偏相関係数を算出した。結果を Table 2 に示す。プライバシー次元とプライバシー志向性は、予測通り、自己意識／維持行動のみとすべて有意な正の相関がみられた。一方、共感的配慮は、他者意識とは有意な正の相関がみられたものの、他者維持行動とは有意な正の相関はみられなかった。したがって、他者のプライバシー維持行動には、他者への共感の側面以外の要因が関わると考えられる。

Table 2　PCSとプライバシー次元、プライバシー志向性、共感的配慮との偏相関係数（N=173）

	PCS下位尺度				
	自己意識／維持行動	他者意識	他者維持行動		
M	3.29	2.80	3.43		
SD	0.81	0.85	0.85		
α	.80	.74	.67	M	SD
プライバシー次元尺度					
趣味嗜好性	.30***	.09	-.04	1.90	0.68
最近過去の経験	.34***	.01	.01	3.11	0.72
所有物	.44***	-.08	.10	3.22	0.64
連絡先	.25***	-.01	-.06	2.82	0.90
外見身体的特徴	.35***	.03	.09	3.18	0.77
価値観	.27***	.05	-.02	2.11	0.76
プライバシー志向性尺度					
独居	.45***	-.09	-.05	4.26	0.69
精神生活の非公開	.49***	-.05	.04	3.99	1.02
病気、精神的欠陥の非公開	.60***	-.14	.00	3.75	0.87
共感的配慮尺度	.14	.19*	-.08	3.57	0.63

注）それぞれの尺度の平均値は、得点が高いほどその特性が高いことを示す。PCSの一つの尺度の分析において、残りの二つの尺度を制御変数とした。なお、プライバシー次元尺度は、それぞれの情報次元について、“親しくしている人”と“顔見知り程度の人”に知られたくない程度を測定する尺度である。同様の結果が得られたため、“顔見知り程度の人”の結果のみを示す。
*p<.05, ***p<.001.

②研究１－２：信頼性、妥当性の再検証

PCS の各次元の信頼性係数は、α=.70～.75であった。下位尺度間の相関は、研究１と同様に、自己意識／維持行動と他者意識のみに弱い正の相関がみられた（r=.28、 p<.001）。続いて、構成概念妥当性を検討するため、尺度間の偏相関係数を算出した。結果を Table 3 に示す。他者維持行動は、他者配慮とは予測通り有意な正の相関がみられた。この結果は、他者のプライバシー維持行動には、行動規範の要因が関わることを示している。したがって、研究１－１と併せ、PCS の構成概念妥当性は部分的には確認されたと考えられる。一方、自分本位とは有意な負の相関はみられなかった。この理由として、社会的望ましさの影響が考えられる。他者維持行動は社会規範に沿った望ましい行動であると想定されるため、自分本位な行動基準を有していても他者維持行動をとりやすいことが結果に反映された可能性が考えられる。

Table 3　PCSと行動基準との偏相関係数（N=165）

	PCS下位尺度				
	自己意識／維持行動	他者意識	他者維持行動		
M	3.52	3.21	3.31		
SD	0.68	0.73	0.83		
α	.75	.72	.70	M	SD
自分本位	.07	-.16*	-.03	2.16	0.80
他者配慮	.11	.20**	.25**	4.04	0.59

注）それぞれの尺度の平均値は、得点が高いほどその特性が高いことを示す。PCSの一つの尺度の分析において、残りの二つの尺度を制御変数とした。
*p<.05, **p<.01.

⑵ 研究２：自己情報へのプライバシー意識が未知の他者への自己情報の公開に及ぼす影響

関係予期認知は、高条件（M=2.57, SD=0.92）の方が低条件（M=1.89, SD=0.76）よりも高かったため、実験操作は有効であったと考えられる。また、プロフィール画面の９情報の入力数は、高条件（M=6.29, SD=1.82）の方が低条件（M=5.30, SD=1.59）よりも多く（t(65)=2.37, p<.05）、表出性も、高条件（M=2.44, SD=1.12）の方が低条件（M=1.83, SD=1.07）よりも高かった（t(65)=2.30, p<.05）。一方、コミュニケーション期待（M=3.20, SD=0.72）には差はみられなかった（t(65)=0.90, ns）。

続いて、関係予期の条件ごとに、性別（男性=１、女性=２）、年齢、MPS-I の各因子、コミュニケーション期待を説明変数、情報入力数を目的変数とした重回帰分析を行った。結果を Table 4 に示す。分析の結果、関係予期によって、未知の他者への自己情報公開を規定する要因に違いがみられた。すなわち、低条件では、識別情報へのプライバシーが低いほど情報入力数が多かった。

以上の結果をまとめると、相手との関係予期がないと、自分を特定できる情報にプライバシーを感じないほど未知の他者に自己の情報を公開しやすいと解釈される。一方、高条件では、コミュニケーション期待が高いほど情報入力数が多かった。したがって、相手との関係予期があると、情報プライバシーの影響が弱まると解釈される。今後は、上記の結果を踏まえ、未知の他者への過度の情報公開を抑止する具体的方策を検討していくことが期待される。

Table 4　情報入力数を目的変数とした重回帰分析

	関係予期	
	低条件（n=33）	高条件（n=34）
説明変数	β	β
性別	.08	.02
年齢	-.17	.19
自伝的情報	.11	.37
属性情報	.18	-.22
識別情報	-.70***	-.26
コミュニケーション期待	.08	.50**
R^2_{adj}	.29*	.28*

*p<.05, **p<.01, ***p<.001.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計１件）

①太幡直也･佐藤広英　(印刷中).　プライバシー意識尺度の作成　パーソナリティ研究, 23.　（査読あり）

〔学会発表〕（計２件）

①太幡直也・佐藤広英　関係予期が未知の他者への自己情報公開を規定する要因に与える影響 ── 入力情報数に着目して ──　日本心理学会第 78 回大会, 2014 年 9 月 10～12 日, 同志社大学

②太幡直也・佐藤広英　プライバシー意識尺度の妥当性の再検討　日本心理学会第 77 回大会, 2013 年 9 月 19～21 日, 札幌コンベンションセンター・札幌市産業振興センター

〔その他〕（計１件）

①常磐大学法人広報誌「Topos」第 71 号 p.9 「Spotlight 研究室」にて本研究課題の概要が紹介された, 2014 年 6 月

６．研究組織

(1)研究代表者

太幡　直也（TABATA, Naoya）

常磐大学・人間科学部・助教

研究者番号：００５５３７８６

(2)研究分担者

なし

(3)連携研究者

なし